

佐那河内の牛鋤

民俗班（徳島民俗学会）

青木 幾男^{*1}

1. はじめに

筆者が阿波学会総合学術調査に参加したのは、昭和45年（1970）7月の第17回「麻植パイロット開拓地帯」の調査からで、以来、機会あるごとに犁・鋤の調査を進めてきた。

平成13年度の阿波学会総合学術調査は名東郡佐那河内村で行われた。結団式のあと、佐那河内中学校の民具資料置場で珍しい「牛鋤」を発見した。初めて見るタイプの鋤で、佐那河内村に何故このような形の牛鋤が必要であったかについて調べるみることにした。それは、民具の形態を通して他地域との違いや佐那河内の特徴点を探りたいからであった。

ただ、ここではそれを困難にする幾つかの問題があることを先にあげておきたい。その一つは、徳島の民具研究があまり進んでいないままに伝統的な民具が失なわれ、徳島の牛鋤が一般の人からも忘れられようとしていることである。徳島県内で牛鋤を使用しなくなって30年も経つだろう。その間、徳島では牛鋤についてほとんど記録されていない。したがって佐那河内の牛鋤と言っても、それと対比できる牛鋤を知っている人が少なく、それ程に徳島では民具研究が立ち遅れているのである。

2. 牛鋤と犁・鋤

牛鋤は、一般には「犁」と言った方がわかりやすい。しかし、徳島では何処でも牛鋤、農家は単に「鋤」と言う。ただし、「鋤」と言うのは本来、畑を耕す農具の一部の総称である。鋤には多くの種類が

あり、動きから言えば「打ち鋤」、「振り鋤」、「踏み鋤」、「引き鋤」、「回転鋤」に大別できる。その中で、振り鋤・打ち鋤は土を掘ったり、砕いたりするのに対して、踏み鋤・引き鋤は土を鋤くもので、後者については学名は「鋤」であり、牛馬耕には「犁」の文字が用いられている。打ち鋤は種類が非常に多く、地方ごとに違った呼び名が付けられている。こうしたことから言えば、「犁」は牛鋤の標準語にあたり、それを単に「鋤」と称するのは徳島特有の言い回し（方言）の関係にあると言えるであろう。

民具の伝播は、従来は文書や政治的指導に依ることよりも、昔から使う人が民具を見て「使いよい」とか、作る材料が手近にある、などの理由でその呼び名と使い方を教えて貰って伝播したもので、地方の呼名を辿っていけば、伝播の流れとその地方の生産物の変遷を知ることができる。筆者がその事に気づいたのは今から15年程前、徳島県内各地の畜耕具を調べてからであった。畜耕具と言うのは牛馬に引かせて田畑をたがやす農具の事であるが、牛鋤・犁のほかに「馬鋤」というものもある。牛・馬の別で言っているのではなく、牛に引かせても「馬鋤」という。

吉野川の中流は上郡と呼ばれ、山村で畑地が多く、農家は主として牛を多く飼育していたが、下流の下郡は平地が多く、砂質土壌で染料の阿波藍の主産地であった。製藍作業は時間を気にする仕事が多いためか、下郡には馬の飼育が多かった。上郡にも下郡にも牛鋤・馬鋤ともにみられたが、呼び名は使用する牛馬の別でなく、耕作の目的が違っていた。牛鋤は田畑の土壌耕起（曳く）、馬鋤は水田の練り

*1 麻植郡鴨島町敷地964

(搔く)、畑地では碎土や中耕を目的とした。

そこで以下では、各種の「犁」と比較する中で、佐那河内村に残る牛鋤について考察してみることにしたい。

3. 畜耕具の形

1) 馬鋤 (図1)

「馬鋤」は固有名詞である。馬鋤がいつ頃から徳島で使われていたか判らないが、民具学者の木下忠¹⁾は論文「古代の牛馬耕について」の中で、「馬鋤は最近に発見された北九州市小倉南横代カキ遺跡出土の六世記後半が最も古く、続いて静岡・大阪・兵庫など7～9世紀のもの(木製)が出土している。また『今昔物語集』巻26には、土佐の国幡多郡の農夫が馬齒(馬鋤)を持って田植に行くさまが記されている」と発表している。

また、江戸時代の享保8年(1723)に「砂川野水」によって著述された藍作技術書『農術鑑正記』に、「まぐわ 畑で成育中の作物の間を牛馬で引いて草を枯らし土をやわらげる農具である。作物のうね間が広い場合は齒を5本つけ、狭い場合には2本にするなど、思うように調節できる」と馬鋤が紹介されている。

平成7年(1995)頃、神奈川大学の河野道明教授が『農術鑑正記』の調査のため来徳した時、筆者が藍処の麻植板野など数ヶ所の資料館を案内したことがあった。そのうちの何ヶ所かの資料館には『農術鑑正記』の挿し絵と同じ「まぐわ」が保管されていて、齒の本数の調節を実験していた河野教授は、

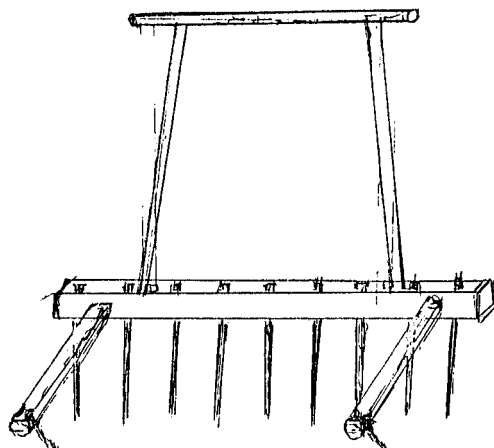


図1 馬鋤 桁80cm(鴨島町、敷地資料館蔵)

「齒の間を容易に調節できるから、マグワ(間鋤)といったのかもしれない」との見解を示された。阿波(徳島県)の藍作地帯では各戸に馬鋤があった。馬鋤は葉藍栽培に重要な畜耕具であった。

2) 長床犁 (図2)

鋤の「床」と言うのは土地に接する部分のことで、作物との関係はこれによって決まる程に大切なところである。古代の犁は長床犁であった。古代から、作物の根と細かい微妙な関係を持ちながら、最も使い良い形が模索されながら、現代に伝えられてきた阿波の牛鋤のなかに、その歴史と伝統を読み取る事ができる。

日本の畜耕具としては、馬鋤と牛鋤しかない。鋤は農具の総称であり、牛鋤は方言、犁は標準語の関係と前述したが、「犁」という文字は早くから固有名詞として使われていた。木下忠は前掲論文の中で、「記録の上では、延長5年(927)に選進された『延喜式』に、宮中の膳部を司る内膳司の農場で、牛を用いて馬鋤や犁をひかせていることが細かく記されており、10世紀後半の著とされる『宇津保物語』また12世記の『今昔物語』にも犁のことが記されているが、考古学的には昭和60年(1985)、本州四国架橋工事の香川県坂出南インターチェンジの建設予定地の発掘調査に際して、古い河床の跡から、多くの木器に混じって長床犁が発見されたのである。これは、伴出した土器類から、古墳時代後期、7世紀のもの」と記している。

出土した犁の部品名について木下は、承平年中(931～38)の源順編纂による『和名類聚抄』をあてはめて、犁底(イサリ)長さ78cmのほか、人が握る柄の犁柄(イサリノエ)、牛が引く棒の犁轆(トリクイ)、へらを持たせる犁柱(タタリカタ)、そのほ

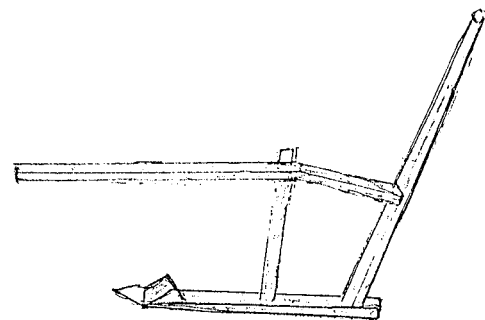


図2 長床犁(鴨島町、敷地資料館蔵)
未底85cm、未轆148cm、未骨130cm

かに犁先や、犁べらを取りつけた木部の大きさも確認している。こうした研究によれば、長床犁は千数百年前より使用されてきたことになるが、筆者は20年近くをかけて調べる中で、高価な魚肥を多量に使用する藍作では耕土の深さが安定していなければならない、藍作と長床犁は切離せない関係にあったことを確信している。この点に関して、興味ある一例を紹介しておきたい。

今年(2002)の2月頃、「徳島民具研究会」²⁾の会員から、北海道札幌市に住む郷土史家の富士田金輔氏(北海道民俗文化研究会会員)の研究論文「ひそかに生き抜いた和犁」が送られてきた。その論文の概要は、「明治の北海道農業にとってプラウ(洋犁)は絶対に欠かせない畜耕具であった。そのプラウにしても、輸入された当時からみれば、馬の体格や土地の条件などによって、いろいろと改良され根づいてきた。また移住民が使っていた在来型和犁にしても、マルコ式や高北式などと、それぞれ改良され変化してきた。ところが明治の始め、庚午事変³⁾のため静内地方に移住した人達が、北海道で藍栽培を試みた時、徳島に調査に来た技師が『馬鋤』『一本鋤』という名で、阿波の長床犁を北海道に導入したという記録が『北海道立文書館』にあった。文書はあっても実物を捜すことに苦労した。藍作がさかんであった静内・余市の各町村を尋ね歩くなかで、余市郡仁木町で徳島と同じ、長床犁を発見した。明治から百余年～阿波の長床犁(馬鋤・一本鋤)は形を変えることなく、北海道で大正9年生まれの下山君子さん(仁木町東町在住)が、使用する頃まで活躍した」という、民具の伝播に関する注目すべき論文であった。

3) 長床犁 b (x型1) (図3)

図2との前後関係は不詳であるが、犁柄と犁柱がx型になっているのが特徴である。11年前に由岐町で見た鋤はこの形であった。藍作地帯周辺部の麻植・阿波・美馬など傾斜地に近い地帯に比較的多く残されている。40年前にも東京農工大学の教授が調査にきており、この型の犁は県外には余り見かけられず、徳島独特の形のものかもしれない。そして面白いことに、時代が新しくなるにつれて床の長さが短くなる。始め木製の長床犁であったものが次第に短くなり、中床犁(40cm)とも言われるようにな

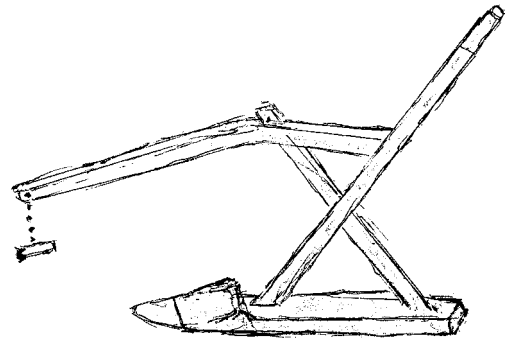


図3 長床犁(鴨島町、敷地資料館蔵)
未底82cm、未轆171cm、未骨137cm

り、床を鋳鉄で造ったものも現れた。

4) 中床犁(佐那河内鋤)(図4)

犁柄と犁柱が交叉するx型鋤2のタイプもこれに含まれるが、中床犁は山地部に近い処で見かけることが多かった。しかし、今回調査した佐那河内鋤は初めて見る珍しい形の鋤であった。鋤といえだいたい似たようなものが多いが、これは各部が短く、がっちりしている。材料は桧で、床だけが櫟^{けやき}で出来ている。底面40cm、へら面21.5cm、上面21cm、後方9cmで、ほぼ三角形に近い形をしている。その他の全体の木部もしっかりと仕組まれていた。人が握るイサリノエ(犁柄)が116cm、牛の引く棒部のトリクイは125cmで、総体が少し小型でかっちりとして、運搬し易く美的でもあった。

鋤の働きは鋤の先(床)の方向と、牛の曳くトリクイの角度で決まってくる。角度が少なければ浅く、多ければ深くなる。それゆえ、長床犁は安定性があるのに対して、短床犁は操縦者が自由に耕土の深さを変えられる構造になっている。調査した佐那河内鋤のトリクイの側面には「平井式」との焼印があり、

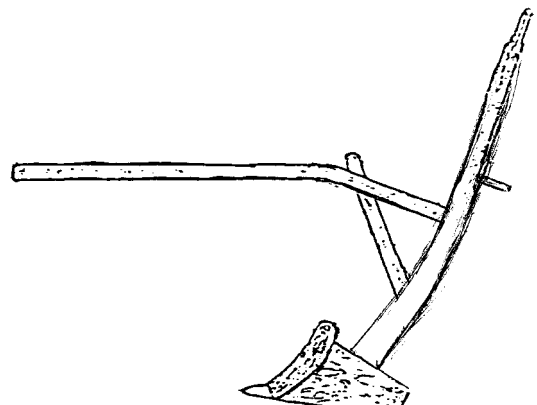


図4 佐那河内鋤
未底40cm、未轆125cm、未骨116cm

イサリノエの横に「徳島市勝占町〇〇、平井農具製」と記銘があるので注文品であろう。

5) 深耕鍬（短床犁）（図5）

日本の農家で、「鍬」が「犁」と呼ばれるようになるのは、明治の食糧増産運動のために北九州の馬耕教師が全国を回って、深耕犁（抱え持ち鍬）という犁で、耕地を深く耕し、かねごえ（合成肥料）を深く施す農法を指導し広めたためと言われている。

徳島で普及するのは遅く、大正近くなってであろう。徳島ではこれを「スキグワ」と言っていた。

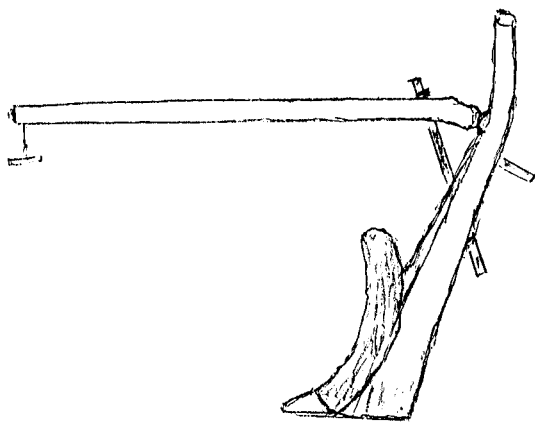


図5 深耕鍬（鴨島町、敷地資料館蔵）
未底15cm、耒轅140cm、耒骨120cm

4. まとめ

以上、各種の「犁」を比較する中で、佐那河内の牛鍬（中床犁）を説明し、長床犁との関係についても触れてきた。

佐那河内中学校の民具資料置場に保管されていた牛鍬については、資料の提供者が「佐那河内村字仁井田 内藤昭文」と記されていたので、9月14日に内藤家を訪ねた。内藤氏は昭和4年1月9日生まれの72歳で、この鍬について知ることができた。内藤氏によれば、佐那河内村の棚田で使うのがこのタイプの鍬という。本来は長床犁を使うのが理想的だが、棚田は道が狭いので鍬は肩に担わなければ運べない。そのために、棚田に使用できる鍬として完成しているのが、この鍬であると説明された。

佐那河内村は園瀬川沿いに盆地や川岸段丘が多く、いわゆる棚田で良質の米を生産していた。『徳島百科事典』によれば、「一本谷・嵯峨谷の谷底平野・河岸段丘上は、かつて藩主への献上米を産す」

とあって、江戸時代から良質の米産地として知られており、同書には佐那河内に蜜柑がひろく栽培されるようになるのは明治になってからと記されている。筆者も30年程前に、明治40年（1907）生まれの叔母から「佐那河内米が一番おいしい」と話しているのを聞いたことがある。

棚田米がなぜ美味しいかと言う事について、内藤さんは「棚田は水が澱まない（くさらない）。出し流しでもない。水田を開いたとき、耕土の下に山土を10cmばかりうちこんで底土を入れる。底土がなければ水は溜らない。新しい水中の肥料分は少しずつ底土で濾過して稲を育てる。新しい水と、適当な肥料で育てるから棚田米は旨い」と話してくれた。また「底土は棚田の生命である。もし他の鍬で底土を割っては大変で、底土を全部やり替えなければならない程の大事業になる。この鍬（中床犁の牛鍬）は軽く安定した床になっている」とも付け加えてくれた。

それを聞いて筆者は、「山田米は旨い」という話しを思い出した。生家の付近には川島洪積層台地があり、その台地上の水田で生産される米を「山田米」という。山田の水田には底土を入れてあると言われていたが、内藤氏のお話からこの理由を知ることができたような気がする。

犁も鍬も農業の基本である。地域の状況に応じて、その形や呼名も数限りなくあるが、その一つ一つに作物の歴史と農家の苦心が秘められていることを改めて知ることとなった。

注

- 1) 木下忠：1929年生（故人）。考古学、民俗学、技術史専攻。文化財保護部主任。文化財調査官。著書に『埋甕－古代の出産習俗』など。
- 2) 徳島民具研究会：1986年結成。事務所は鴨島町の敷地資料館。年報『徳島民具研究』1～5号発行。会員30名。
- 3) 庚午事変：明治3年（1870）に蜂須賀家と稲田家の家臣団の分藩運動によって起きた事件。稲田家は北海道へ移住を命じられ、本藩側は首謀者10名が斬罪に処せられた。

文献

- 木下 忠（1986）：「古代の牛馬耕について」、『技術と民俗』下巻、22～26頁、小学館。
- 砂川野水（1723）：『農術監正記』享保8年（『日本農書全集』第10巻、農山漁村文化協会、1980年復刻）。
- 富士田金輔（2001）：「ひそかに生き抜いた和犁」『とどまつ』（北海道開拓記念館）、No.20（通巻43号）、12～15頁。
- 徳島新聞社編（1981）：『徳島百科事典』同社。